

ルーマニア言語学史における ヨルグ・ヨルダンの位置

ゲオルゲ・イヴァネスク
谷 口 勇・訳

はじめに



G. イヴァネスク教授

この論文は満75歳の誕生日を前に急逝したゲオルゲ・イヴァネスク教授（1912. 11. 2. - 1987. 6. 3.）の遺稿“Locul lui Iorgu Iordan în istoria lingvisticii române,” in *Analele Științifice ale Universității “Al. I. Cuza” din Iași* (Serie Nouă), Secțiunea III, e. Lingvistica, Tomul XXXIII, Anul 1987 (Omagiu Profesorului dr. doc. G. Ivanescu, membru corespondent al Academiei R. S. România la a 75-a aniversare), pp. 95-104 の全訳である。（この雑誌を恵贈して下さった Iași 大学図書館に感謝する。）

イヴァネスクの著書としては、*Istorie a limbii române* [ルーマニア語の歴史], (Iași, 1980), *Linguistică generală și românească* [一般およびルーマニア言語学] (共著) (Timișoara, 1983), *Istoria limbii române, Problemele capitale ale vechii române literare, Gramatica comparată a limbilor indoeuropene* [ルーマニア語の歴史。ルーマニア古文の主要問題。印欧諸語比較文法] (Th. Simenschy と共著) (Timișoara, 1983) があ

り、その他、Alexandru Philippide, *Opere alese, teoria limbii* [著作選集。言語の理論] (București, 1984, pp. 287-337) にも寄稿している。論文多数。

1974年の夏、ブカレスト大学のサマー・スクール（於ブラショフ大学）で訳者はI・ヨルダン教授（1888— ）の講演に出席する機会を持ったが、この現役の大言語学者の全体像をイヴァネスクは的確に描述していて、我国のロマンス語学者にも極めて有益な文章と思われる。（訳者）

§ 1. 少壮文法学派の時期に教育を受けた最も重要なルーマニアの言語学者たち——Al・フィリッピデ、Ov. デンスシアヌ、I・A・カンドレア、S・プシカリウ、Th. カピダン——は、当初、少壮文法学派の言語観や研究方法を吸収した。しかも時とともに、とりわけ1914—1919年後には、彼らは少壮文法学派の考え方のうち、多かれ少なかれ顕著な若干のものを築き上げるに至った。

Ov. デンスシアヌとI・A・カンドレアのみは、フォークロアをも同じ位詳しく研究したり、言語の説明において民衆の精神（文化）生活に留意したりしているハスデウの語彙研究の仕事に影響されてのことであろうが、1905年以来、文化および言語の諸層——とりわけ、ある時期から他の時期にかけての——や、民衆の主たる活動の言語における反映——たとえばローマ人とルーマニア人における放牧生活——を話題にするに至った。言語はこのように、デンスシアヌにとっては、民衆の文化生活の“アイコン”と化したのである。これは同じ時代に展開を見た観点であったが、とりわけその後、A・メイエがデュルケームの社会学の影響下にそれを発展させることになる。

だが、1905年以来、ヨーロッパ言語学は新しい道を歩むのであり、これを私は少壮文法学派の言語学からはっきり区別したいと思う。

ルーマニアの言語学者のうちでは、すでに今世紀初頭からM・バールトリと関係を保ち、かつウィーンでW・マイア＝リュプケと一緒にロマンス言語学を研究したS・プシカリウだけが、少壮文法学派以後の言語学者たちの進路となった道に当初から位置している。

この時代の言語学者たちの主な問題は、少壮文法学派によって定式化され

たような、つまり、特定言語にとってのみ、かつその言語の所与の瞬間においてのみ有効な、音声法則ははたして存在するのか、またそれには例外が含まれているのか、という点であった。

少壮文法学派や、他の若干の言語学者たち（G・I・アスコリ、A・メイエ）は、そういう例外は、心理的なものや精神が何の役割をも果たしていない調音器官の幾つかの機械的交替と関係があるとすら考えていたのである（もっとも、彼らは言語が心理的ないし社会的事象であることを認識していたのである）。

音声法則の原理には、音声学を真の科学に変えるかも知れぬという実際的重要性があったにも拘らず、新世代の若干の言語学者たちは、何らかの哲学的概念に影響されたにせよ、されないにせよ、音声交替が世界の機械的事象のうちに組み込まれることや、自然法則と同種のものであることを否定した。彼らは反対に、音声法則が心理的、精神的、社会的事象であり、こういう性質上、それには例外も存在せざるを得ない、と主張したのであった。

少壮文法学派の言語学者たちがより広範囲にわたる音声交替の発生を、言語共同体（ある方言ないし或る言語の話し手）の全構成員に存在する調音傾向によって説明したのに対して、新世代の若干の言語学者たちからすれば、そういう事象はまず一個人において出現し、ついで模倣の道を通して他の人びとにも波及したものだったのである。これはK・フォスラーやM・バールトリの観点だったし、この観点は多くの言語学者たちによって受け入れられた。

一方、音声交替について言われていたことは、必要な変更を加えれば、他の言語部門にとっても有効と見なされた。しかしながら、形態論、統語論および語彙論において、いずれの言語学者も交替をば、起源では個人的だが、やがて言語集団の全成員において一般化されたもの、として説明していたことが見失われた。その場合でもただメイエのみは、幾つかの音声交替が形態組織の特定の傾向から生じており、しかもこれを通して、ある言語集団もしくは語族にすらも共通であると説明していたのである。

また、マイア＝リュプケのような少壮文法学徒がやはり、音声交替についてはフォスラーやパールトリのそれと同じ考え方をしていたという事実も見失われた。この新しい観点は、S・プシカリウにおいても、おそらく当時から見いだされるものなのだ。彼はウィーンではマイア＝リュプケの弟子兼協力者だったし、もちろん、後者の音声交替についての考え方を吸収したのだった。

一方、新世代の言語学者たちと少壮文法学派との相違はそれだけに限られてはいなかった。フォスラーおよびその信奉者レオ・シュピッツァーによって実践された文体論は、彼らが作家たちや、さらには研究対象たる言語を話す民衆の、心理的ないし精神的特徴を発見することに實際上努力した点で、旧い文体論と区別されるのである。少壮文法学派とは異なり、言語の歴史的研究のみならず、言語学的記述——いわゆる共時言語学——をも真の科学と見なしたF・ド・ソシュールの理論は、新しい精神のなかで成立した記述文法研究を誕生させたばかりか、旧い文体論とは異なる文体論、すなわち、言語の感情表現を研究する情意的文体論をも誕生させた。

文法の新しい理論家A・セシュエと、文体論の新しい理論家シャルル・バイイは、彼らの恩師とともに、言語学における新しい方向の指導者となった。他方、G・ヴェンカーやJ・ジリエロンによって創始された方言的な言語事実の地図への記録は、言語地理学の創設へと導いた。新しく実践された音声学——実験音声学——は、少壮文法学派の音声学とも、さらに一般的には、より旧い音声学——感覚だけを頼りに、しかも簡単な実験手段をもって実行されていた——とも異なっていた。

§ 2. とりわけ第一次世界大戦後には、なканずく音声の歴史や文法形式の研究に限られていた少壮文法学派の言語学説や言語学的方法が、統語論および語彙論の研究のみならず、新しい若干の哲学的概念から生じた、言語学上のあらゆる関心事を包含するためには、余りに狭過ぎたことが、ヨーロッパの全言語学界にとって明らかになった。新世代のルーマニアの言語学者た

ち——フィリッピデの弟子たちであれ、デンスシアヌやカンドレアの弟子たちであれ——が、新しい学問環境のなかででき上がったのであり、彼らの考え方は、かつての師匠たちのそれとは大いに異なっていた。

ヤシのヨルグ・ヨルダンとジョルジュ・パスク、ブカレストのAl・ロセッティ、Al・グラウル、クルージュのジェオルジュ・ジュグレア（彼はデンスシアヌの弟子だった）およびN・ドレガヌ（彼はプシカリウとは独立して修養を積んだ）、その後は、より新しい世代の言語学者たち——D・ゲズダル、S・ポーブといった——が、西方の新しい言語学潮流の原理や作業方法を吸収しようとするのである。

S・プシカリウはルーマニアの言語学を新しい道に導くための領袖的位置を占めていた。そうこうするうち、フィリッピデは『ルーマニア人の起源』（*Originea românilor*, I-II）において、少壮文法学派の考え、しかもアスコリやメイエによる調音の根底に関しての考えをより深化して、包括的な学説をルーマニア人に提供した。彼の学説は、言語の伸展と構造における極めて重要なこの部門に関するルーマニアの学問において今日まで練り上げられてきたうちで最も詳しいものである。これととも、ヨルダン教授が調音の根底のような考えに基づいてでき上がっている、西方の新しい言語観を吸収していた時期には、言語の伸展および構造においていかなる役割も果たしてはいない。このように、ヨルダンと彼の恩師との間の考え方や方法の相違は、より大きくなって行くのである。しかし、師匠への敬意から、ヨルダン教授はフィリッピデの死後もこの考え方に反論しようとはしていない。

ヨルダン教授が西方で研究していた時期にフィリッピデによって展開された心理的根底の考えに関してはどうかと言えば、フィリッピデは事実上、西洋の多くの言語学者たち、なかでもフォスラーと同じ路線に立っている。

一方、デンスシアヌは、彼もまた、人間精神（つまり、民衆の文化や、人間の美への関心）の表現としての言語という自らの考えを発展させ続けたけれども、彼は言語の伸展および構造における調音器官の純粹に肉体的な役割を決して否定することはしなかった。これら二人のルーマニアの言語学者は、

今世紀の初めの十年間の彼らの努力——当代の言語学において際立っていた——からして、当時の外国の言語学派のいずれの一つにも含め込まれ得ないのである。

事態がこのようだったから、新しい潮流に対して私的な理論や方法を開陳したり擁護したりせざるを得なくなったフィリッピデとデンスシアヌは、これら潮流の或るものに反対しなくてはならなかった。こうした事実の結果として、ヤシやブカレストの言語学派の枠内では意見の相違が生じた。これら学派の創設者たちの弟子の或る者は、言語の諸問題において自分たちの師匠とは違ったふうに考えたり、また、彼らのかつての師匠たちが未開拓の分野で活動することを目論んだりするに至った。

礼節を保つためもあって、彼らは自分たちの師匠と理念闘争を行うのを欲しなかったし、また現にそういうことは行わなかった。ヨルグ・ヨルダンにしても、ロセッティやグラウルにしても、メイエから言語動向の理念を吸収して、これをルーマニア語に応用したし、また、言語は社会的事実である以上、社会の発展につれて伸展するとの考えをも彼らは吸収したのだった。

要するに、最年長のルーマニアのすべての言語学者たち——プシカリウ、ロセッティ、グラウル、ヨルダン——は、プラハ言語学派の基本理念、ことに、音声と音素、音声学と音韻論とを区別する考え方、の信奉者となったのである。

とはいえ、それぞれの大学中心地に属する新世代の言語学者たちは、総じて、前もっての合意なしに、異なった方向で研究した。クルージュでは『ルーマニア言語地図』(*Atlasul lingvistic român*)の準備が始まったし、若干の若い言語学者たちは言語地理学を専攻した。S・ポープはこの傾向を最大限に強化した人である。ブカレストでは、実験音声学の領域での研究が好んで行われ、また、メイエの言語学派の観点がルーマニア語に応用された。Al・ロセッティはこの方向の最も重要な代表者である。ヤシでは、ヨルグ・ヨルダンが同時代の言語状態——西方の言語学者たちによって、当時まで無視されていたわけではないが、綿密に研究されてはこなかった——の研究をし

ようと決意したのだった。

ド・ソシュール、セシュエ、バイイと同じようにスイス人であるH・フレーの単独の著作『誤用の文法』(*La grammairie de fautes*, Genève, 1934)が、彼に範例として役立つことができた。他の機会を利用して強調しておいたことだが、ヨルグ・ヨルダンはすでに第一次世界大戦前から、ルーマニアの知識人たちが犯す言語上の誤謬を記録することに魅力を感じていた。だから、この点に関しては、彼の関心事は第一次世界大戦後に、西方の若干の言語学者たちの関心事と出会い、そして、彼はF・ド・ソシュールが計画していた言語学へと自らの衝動によって突き進んだのだ、と言って構わないのである。

グラウルにしても、現代ルーマニア語の研究に当初から魅かれていた。ロセッティはルーマニア語の幾つかの新しい歴史の練り上げに生涯を捧げた。それというのも、彼の師匠Ov・デンスシアヌの仕事は私的な若干の見解を開陳していたとはいえ、さらに改良を必要とするものだったからだ。Ov・デンスシアヌによって開始された方向は残存して、T・パパハジやD・シャンドルによって続行される所となった、——新しい言語学の潮流に多少影響されてではあったけれども。

クルージュでは、カピダンが少壮文法学派の関心事や文法の根底を相変わらず研究した。ヤシのG・パスク、クルージュのG・ジュグレアはとりわけ語源研究に、旧い理論や文法に即しながらも、“言葉と物”(Wörter und Sachen)のような新しい言語学の潮流に影響されて、没頭した。ドレガヌ・ボグレア——フィリッピデの弟子であったにも拘らず、クルージュの言語学派に属していた——は、統語論と意味論(この二つは今や往時におけるものか言語学者たちの情熱をかきたてていた)に専念しようと欲した。

だが、ヨルグ・ヨルダンはそれだけに自制するつもりはなかった。彼はバイイがフランス語に対して実行していた情意的文体論をルーマニア語に対して実行しよう欲したのである。しかも、この文体論を彼は、フォスラーの文体論について学んだもの(かつて私に告白したところでは、私の間違いでなければ、1929年彼はフォスラーと個人的に知り合うためにわざわざミュン

ヘンに出かけて、彼を訪問したとのことである）やマイア＝リュプケの弟子
レオ・シュピッツァーの文体論から学んだもの（ヨルグ・ヨルダンがシュピッ
ツァーが自分の最良の友だったとかつて私に言明したことがある）と結びつ
けようとしたのだった。上述のとおり、ヨルグ・ヨルダンはメイエの理論を
吸収し、これを深く研究し、特殊的にはルーマニア語に、一般的にはロマ
ンス諸語にこれを応用したのである。彼は言語地理学をも決してないがしろに
しなかった。現に、『ルーマニア言語地図』に基づいて組立てられた研究を
数点発表している。彼は新世代の他のすべての言語学者よりも第一に、ル
ーマニア言語学においてロマンス言語学および一般言語学の新傾向を代表して
いるのである。

§ 3. 言語学上の新しい考え方や、言語学上の仕事の新しい方法をわが物
としたとき、ヨルダンは少壮文法学派の作業方法や努力を反映した業績をもっ
て言語学的徒弟時代をすでに実践していた。ましてや、フィリップピデの提案
で研究テーマが決められた博士論文『*e-, -e* の位置における *é* と *ó* の二重母
音化』(*Diftongarea lui é și ó în pozițiile \check{e} -, -e, Iași, 1921*) は、ボンのマ
イア＝リュプケの指導下になされた研究「南部イタリア語におけるラテン語
の *ci* と *ti*」(“Lateinisches *ci* und *ti* im Suditalienischen,” *ZfrPh*,
XLII, 1922, pp. 516-650) と同じく、情報の豊富さ、規模において少壮文法
学派の歴史音声学の仕事の大半を凌駕していた（この博士論文はルーマニア
語で幾度も論議されたが、それは音声学の局面からではなくて、語源学の観
点からだった）し、彼の主要性質の一つを証明するものなのである。すなわ
ち、彼が実現しようと目論んだ仕事のための資料収集に関しては並外れた労
苦をも惜しんではいないのである。

ヤシ大学ロマンス文献学教授をしていた間は、ヨルグ・ヨルダンは少壮文
法学派の精神で講座を勤めることを要求された。当時、彼はロマンス諸語の
比較文法の講義を担当したが、これはイタリア文学史やスペイン文学史の学
生等の使用のために、石版刷りでコピーされた。

一方、彼はまだ外国で研究していた時代から、ロマンス言語学の新しい潮流に関しての総体的仕事の編集に専念していた。彼は当時、新しい学説（たとえばフォスラーのそれ）について、ルーマニア語で若干の論文ないし書評を発表したし、また、堂々たる研究「ロマンス言語学の現況」（“Der heutige Stand der romanischen Sprachwissenschaft,” in *Stand und Aufgaben der Sprachwissenschaft*, Festschrift für Wilhelm Streitberg, Heidelberg, 1924）では、少壮文法学派の代表者としてのマイア＝リュプケに反対する、きっぱりした態度を取ったのだった。¹⁾

ロマンス言語学——ダンテによるその創設から1900年に到るまで——についての章を含んだ膨大な著作は、『ロマンス諸語研究入門、ロマンス言語学の進展と現状』（*Introducere în studiul limbilor romanice, Evoluția și starea actuală a lingvisticii romanice*, Iași, 1932）の表題で発行された（本書は1931-1932発行年の付いた大学講義だった）。これはエディンバラ大学教授ジョン・オーアによって英語に翻訳され、ロンドンで発行されて[1937年]、すべての英語圏ばかりか、ラテン・アメリカでも、ロマンス言語学および一般言語学のマニュアルとして用いられた。第二次世界大戦後、ロシア語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ドイツ語にも翻訳されたことは、本書の有用性を示している。*

ヨルダン教授は本書においては独自の言語観を導入することはしないで、新しい言語学上の潮流の観点（言語活動および作業方法についての概念）やロマンス言語学の特殊ないろいろな問題を肯定的に陳述している。本書は西洋ロマンス言語学の立場で書かれているのである。

ヨルダンは、少壮文法学派として開始しはしたが、時とともに少壮文法学派の考え方や手順から外れるに至った若干の言語学者たちの考え方を何らかの章で別個に説くことはしていない。私が指しているのは、フィリップピデやデンスシアヌのことであって、彼らはロマンス言語学や一般言語学の重要人物として紹介されるだけの価値があったのである。²⁾ 一方、前世紀の言語学者が話題にされているためか、ハスデウさえも論じられてはいない（彼は欠

陥がいろいろあるにせよ、依然として概念や方法における革新家なのである)。同じく、マイア＝リュプケが音声交替に関して新しい言語学上の潮流に属する若干の概念を抱いていたことが指摘されていないし、他方、1ページ弱しか割かれていないS・プシカリウは、バールトリの考えの信奉者として紹介されてはいない（たとえこの教養のあるルーマニアの学者が後者の考えに独立的に到達したにしても）。

しかし本書は研究者たち、とりわけ青年層に対して、今世紀のロマンス言語学者たちの活動について極めて豊富な情報を提供したのだった。それは今日に至るも、今世紀の初めの30年間にロマンス語学に影響を及ぼしたり、それを支配したりした一般言語学理論や、ロマンス語学者たちが新しい方法を応用する途上で到達した成果についての、大がかりな唯一の紹介書となっているのである。

§ 4. ヨルダン教授が当時西方で行われていた原理や方法をルーマニア語に応用しようというその計画を実行に移せたのは、フィリッピデの死（1933年）によって空席になっていた、ヤシ大学のルーマニア文献学教授に就任（1934年）してからのことに過ぎない。だが今日でも、彼はこの計画を活用したわけではない。彼はその教授としての活動を、起源から今日に至るまでのルーマニア語の歴史が現れるような講義を行うことから始める必要があると考えた。

したがって、すでに1932年に、ヤシのルーマニア文献学研究所（この研究所は、フィリッピデの死後、ヨルダンにより、後者の名前がつけられた）の所長に任命されたときから、彼は現代ルーマニア語の、正しいにせよ誤っているにせよ、改新を研究するという、彼の崇高な関心事を実現させ始めたのだった。教授の作業計画は「アレクサンドル・フィリッピデ名称ルーマニア文献学研究所公報」(Buletinul Institutului de Filologie Română "Alexandru Philippide", 第I巻 (Iași, 1934) に、「序言」(Cuvînt înainte) の表題の下に発表された。

教授職に就いてから、ルーマニア語文体論を練り上げるという自らの古い計画を実現させたのは、まさしくこのテーマで講義を行い始めた1939年秋のことに過ぎない。初稿としては、文体論の講義案は1940年の学年末に終え、そして、「形態文体論」(*Stilistica morfologică*)と題する断片は、「ルーマニア文献学研究所公報」, VII-VIII巻(1941, pp. 1-148)に発表された。

この講義録はさらに改善された上、戦時に印刷され、『ルーマニア語文体論』(*Stilistica limbii române*)の表題で刊行された(ブカレスト, 1944年。第2版はそのままの形で、ブカレスト, 1976年刊)。作家たちの言語上の革新や誤謬に関して多年にわたって集められた資料——そのうちの幾つかは「ルーマニア文献学研究所公報」に発表された——は、集められ書き直されて、『現代ルーマニア語。“誤用”の文法』(*Limba română actuală. O gramatică a “greșelilor”*, Iași, 1943)と題する著書となった。

なかんずくルーマニア人の現状を論じた、ルーマニア語統語論の膨大な講義を、教授はヤシにおいて1940-1944年に行った。この講義はもちろん、後にブカレスト大学で行われた講義の基礎をなすものであり、やがて『現代ルーマニア語』(*Limba română contemporană*, București, 1954, 1956²)の表題で出版された。本書は、今日までに築き上げられた限りでは、ルーマニア語文法の最も詳細なものの一つである。表題から明らかなように、本書は共時的な観点に支配されている。

ブカレスト大学では、ヨルグ・ヨルダンはヤシで行われたロマンス諸語比較文法の講座とは全く異なる表題の講義『ロマンス言語学入門』(*Introducere în lingvistica romanică*, 石版刷り, ブカレスト, 1957年)をも行った(とはいえ、講義の組み立てからすれば、それはやはり比較文法に関係しているのである)。後の再版では、教授は、協力者マリア・マノリウのテキストにスペースを割り当てるため、自分のテキストの一部を断念した。この形のままで、本書はスペイン語に翻訳された。*

上述した所に従えば、この講義では、メイエの所説に起源をもつ、ロマンス言語学の傾向なる理念が現れているのである。

§ 5. 一般ロマンス語学の領域におけるヨルグ・ヨルダンの活動は、それだけにとどまらない。ボンにおいて南部イタリア語の *ci* と *ti* に関する研究のための資料を収集しながら、彼はこの方言には、ルーマニア語と共通の一連の言語事実があることを確認した。収集資料を基にして、彼は「南部イタリアの方言とルーマニア語」(“Dialectele italiene de sud și limba română,” in *Arhiva, Iași*, XXX, 1923–XXXV, 1928) と題する研究を執筆することができた。

記録された言語事実は、民衆ラテン語の遺産としてであれ、独立の出現としてであれ、場合々々に応じて、彼によって説明されたのだった。面白いことに、ルカニアのある地方では、ラテン語 *ŭ* は、イタリアの中央部および南部の残りの地方や、イベリア半島、ガリア、および北部イタリアにおけるように、*o* に変化しなかった。ダルマチア語およびルーマニア語と、アルバニア語のラテン語的要素とを特徴づけている *ŭ* の保存は、ローマの支配時代におけるこれらの地域と南東ヨーロッパとの間の緊密な結びつきを証明するものである。

約十年後にやっと、G・ロールフスは同地域の方言調査の過程で、同じ確認を行うことになるが、彼の弟子H・ラウスベルクは、もう数年後に、重要な結論——南部ルカニアの民衆ラテン語はヨーロッパ南東部の民衆ラテン語とともに一つの方言を構成している——を引き出すことになる(彼の著書『南ルカニアの方言』(*Die Mundarten Sudlukaniens*, Halle, 1939)を参照)。

§ 6. ヨルグ・ヨルダンはルーマニア言語学においては別の点でも開拓者だった。彼はルーマニア地名学の研究に没頭し、この分野で初の総括——『ルーマニア地名学』(*Rumänische Toponomastik*, I, II, Bonn, 1924, 1926. ルーマニア語版, 1952, 増補第2版, 1963)——を公刊した。この著作には幾つかの欠陥があり(とりわけ、語源の確定のために、地名の最古の形——文書で存在を確かめられるもの——を用いていない、といったような)、それらは第2版でも取り除かれなかった。とはいえ、資料のすばらしい取り

扱い、ルーマニア地名学の根本問題および細部の問題に対してのあくまでも正しい解決、これらの長所があることを著者に拒むわけにはいかない。今日に至るまで、本書に取って替る別の総括は出ていないのである。

ここ数年のうちに、ヨルグ・ヨルダンは『ルーマニア家族名辞典』(*Dictionar al numelor de familie românești*, București, 1983)をも刊行したが、これは N・A・コンスタンティネスクの類著『ルーマニア固有名詞辞典』(*Dictionar onomastic român*, București, 1962)や他のルーマニア固有名詞研究書に続くものである。

§ 7. 1949年後から定年退職するまでの間、ヨルグ・ヨルダンがブカレストの言語学研究所所長としての職務をも果たしたとき、彼は西洋のロマンス諸語、とりわけ、スペイン語に再び深く没頭し、研究所の広範な研究者集団のこの分野における仕事を組織することができた。この時期に、彼は『スペイン語の歴史』(*Istoria limbii spaniole*, București, 1963)——元は大学での講義——や、研究所の夥しい協力者たちと共著で極めて価値の高い『ロマンス諸語選文集』(*Crestomatie romanică*, București, I, 1963, II, 1965, III, partea a I, 1968, partea a II-a, 1971, partea a III-a, 1974——ロマンス言語学の創立いらい今日までに現れたすべての著作中、最も浩瀚な選文集——をも刊行した。

§ 8. ヨルグ・ヨルダンの言語学上の全活動——構想や、作業方法およびそれを応用した結果——を特徴づけようと試みるに当たって言わねばならぬことは、それが(ルーマニア言語学の他の学派に属する世代の同僚たちの活動もそうだが)少壮文法学派全般の活動や、少壮文法学派の影響下に形成されたルーマニア言語学者たち(フィリッピデとデンスシアヌ)の活動と対立しているという事実である。

時とともに、フィリッピデとデンスシアヌは西方において形成されたのではない独自の考え方や作業方法に到達したし、したがって、彼らの晩年の活動

は少壮文法学派に対立するものではあったけれども、西方の、1905年以後の極めて有効な新しい理念の下に形成された新世代の言語学者たち——そのうちにはヨルグ・ヨルダンも含まれる——は、自分らの師匠たちのこれまでの活動を乗り越えて、³⁾ 新しい考え方や方法をルーマニア語に——ヨルダンの場合には、他のロマンス諸語にも——応用しようとした。彼らは自分たちの見解とフィリッピデやデンスシアヌの見解との総合が可能（ないし必要）とは見なさなかった。

ヨルダンはともかく、外国の若干の言語学者たち——フオスラー、シュピッツァー、パールトリ、ジリエロン（彼の場合はいつでもというわけではない）——と同じように、少壮文法学派の考え方や、彼らの研究方法をそっくり拒絶したのだった。

実際には、総合は可能であって、現にそれは同じ世代に属する他の言語学者たち——たとえば、Al・グラウル——によって実現されたのである。グラウルは少壮文法学派の理念および活動のみならず、1905年以後の言語学潮流に属するメンバーたちの理念および活動をも評価している。

ルーマニアにおけるこれら二つの対立した立場は、西方における対立した立場の反映なのであって、これは、言語学の弁証法的発展における、ヨーロッパの、より広範な過程のなかで補完されるのである。しかもそれは和解させることが可能なのだ。

われわれとしては、少壮文法学派から、音声交替は自然の交替であるという考えや、音声交替は調音器官（これは自然——人間の本性——である）の交替の反映であるという考えを受け入れる必要がある。さらにまた、音声交替は言語集団全員から独立に生じる（言語集団はたいてい一つまたは複数の肉体的なタイプを示すものだからだ）ことをも認めなければならない。

形態論的体系、統語体系および語彙体系から強いられた改新を除き、形態上、統語上および語彙上の改新のみが、一個人の、もしかして、かなりの人間の（だが決して集団全員のではない）創造なのであるが、こうした改新がやがて言語集団の全成員に広がるのである。音声交替の性質および原因に関

する少壮文法学派の所説は、彼らが言語の他の交替も同じように生じたと信ずるという誤りを犯さなかった以上、正しかったのである。

フオスラーの言語学派およびバールトリの特定流派の理論にしても、これらの言語学者が行ったように、それを音声交替にも適用するという誤りを犯しさえしなければ、正しいものなのである。

言語学者たちが音声交替は一個人、一つの政治的、宗教的、経済的または文化的中心から、残余の言語集団へと広がるという考えを依然として放棄しないという事実は、ローマないしラティウムという統治の中心から、ローマ帝国全土に広がり、その後は、統治の中心ならびに他のいろいろの中心から帝国のより大きな、もしくはより小さな範囲へ常に広がった改新によって、音声上交替した、民衆ラテン語のイメージを、音声交替の第一の例として彼らがいつも考慮に入れているということで説明がつく。けれども、このイメージ——H・シュハルトがこれを創りだし、これを学界に押しつけ、それから、マイア＝リュプケとバールトリならびに他の多勢（フィリッピデまでも）がこれを再び採り上げた——は間違っているのだ。民衆ラテン語はイタリアにおいてすでに地域的に相違していたし、それはすでに方言的に分化した帝国に広がったのであり、帝国の基層の影響を受け、また他の諸要因の影響を受けて、長い時間によって交替したのである。

しかも、 $\overset{v}{i} > \acute{e}$ や、 $\acute{u} > \acute{o}$ 等のような、大きな区域に広がっている音声交替は、統治の中心で生じたものが後に、個人から個人へと、模倣によって帝国の或る部分に広がったのではなくて、帝国に植民したイタリアの商人、農民や軍人の移住によってそこに導き入れられたのであるし、他方、基層による音声交替は、この基層（原住民）が存在する地域だけに限られていたのである。

民衆ラテン語の形態上、統語上および語彙上の若干の交替だけが任意の地域に現れて、それから、帝国全土もしくはその若干の地域のみに広がったのだ。民衆ラテン語は本当に民衆語だったのであり、その枠内では、まず第一に固有の音声組織によって特徴づけられる、地域的方言が目立っていた。

それは文化語ないし共通語——この場合には（ルーマニア語で，“complect”に代わる“complet”〔いずれも“完全な”の意〕のような）“音声上の”改新が、それが話されている地域全体ないし帝国の若干の地域だけに広がる——ではなかったのである。

民衆ラテン語についての、こうした誤ったイメージが、シュハルトをして、音声法則の原理の否定へと導いたし——シュハルトはフォスラー説の先駆者と目された——、マイア＝リュプケやパールトリをして、音声交替は模倣によって広がるとの所説へ、また、フォスラーをして、音声交替の精神的特徴なる考えへと導いたのだった。

事実、これらの所説は、それらが出発点にした民衆ラテン語についてのイメージと同じく、間違っているのである。⁴⁾ 民衆方言の言語学、民衆語の言語学は、上に言及した学者たちによって認められたのとは別の、方言の音声発達の法則をもっている。音声交替についてのシュハルト、マイア＝リュプケ、パールトリ、フォスラーの考え方は、文化語（＝文語）に限定しない限り、的外れなのだ（しかも文語の場合でも、音声交替は事実上、法則としては定式化され得ない。それというのも、音声交替は個人的、散発的であるからだ）。こうして、少壮文法学派の言語学的交替に関する所説と新しい学派のそれとの間に和解がなされることが必要となる。真実はこの場合、ロマンス（および一般）言語学の発達の第三期——二つの相反する考え方の総合の時期——で代表されるのである。⁵⁾

これを度外視すれば、今日でも代表者に事欠かない、今世紀の初めの三—四十年間の言語学は前世紀の関心事へ時宜を得た補完をもたらしたことになる。すなわち、旧い文体論を、しかも作家たち（およびまさしく不可分の話し手たち）の特色を見いだそうとする努力をもって再開し、情意的文体論を創出し、空間的言語事実の地図づくりや言語地理学、実験音声学の創出や格別の発達、体系ならびに社会史による言語の説明、がそれだ。この最後の頃は、言語史の練り上げに導き、もろもろの資料が時代毎に、また各時代のそれぞれの局面に従って呈示されることになった（メイエ、フォスラー、デン

スシアヌ、ロセッティ）が、これはまた、前世紀の言語学への反動形態でもあるのだ。

もっと後には、構造主義の反動がやってきた。これは1905年後の潮流に対してというよりも、とりわけ少壮文法学派に対しての新しい対立、新しいアンチテーゼだった。第一次世界大戦後に注目された世代のありとあらゆるルーマニア言語学者はこれを多かれ少なかれ吸収したし、しかも、この新しい研究方向を特徴づけている原理をも吸収したのである（第二次世界大戦後は、それは優勢となったが、結局のところ、生成変換主義者たちによって部分的には論破されたのだった）。

私見では、構造主義者たちは少壮文法学派の所説と、今世紀の初めの三ー四十年間の現れ、別の諸問題を提起した言語学の潮流の所説との総合が必要なことを理解しなかったのである。さもなくば、彼らは音声交替の原因についての彼らの偽りの理論のせいで、この総合を行うことができなかったのだ。しかも彼らは、音声学やいわゆる音韻論だけに没頭したのではなくて、形態論、統語論、語彙論、文体にも没頭した（これらは1930年に入るとともに形成されたあらゆる種類の言語学者たちの関心事を証明するものである）から、言語学上のもろもろの関心事の総合を暗々裡に受け入れたのである。

少壮文法学派の活動も、今世紀の初めの十年間に彼らに反対した人びとの活動も、多面的かつ複合的な真の言語学には必要な歴史的段階——それを通して、真のかつ完全な言語学が創られたか、または今から先創られるはずの段階——であることは明らかだ。明日の言語学は構造主義理論または生成変換主義理論には限定され得ないのである。それは、少壮文法学派や、構造主義以前のその他の方向の考え方や作業方法において命脈を保っていたものを同化する必要があるのだ。

他方、1905年以後に、少壮文法学派との対立を通して、また後者の関心事を補完することを通して活動を考え出した言語学者たちの世代の成果は、ルーマニアの学問の発達において重要な役割を果たし、絶えず考慮されねばならぬような、理論的貢献をもたらしたのである。

ルーマニア言語学および一般言語学の発達のこの段階で際立ったルーマニアの言語学者たちのうちで、ヨルグ・ヨルダンは他の人たちと並んで、しかも彼らよりはるかに重要な位置を占めており、彼はルーマニア言語学の草創期から今日に至るまでの斯学の重要な代表者として認められている。

彼の仕事は、1900-1950年にかけてのルーマニア言語学の必要上から現れたもの（現代ルーマニア語、とりわけ、その改新の研究、ルーマニアの地名の研究）にせよ、世界言語学の新時代に着想を得て現れたもの（ルーマニア文体論の研究）にせよ、ルーマニア言語学に当時存在していたゴールの一つを取り除いたし、そして、当時までのルーマニア言語学の基本的仕事の集成——フィリップデの『ルーマニア人の起源』、Ov・デンスシアヌの『ルーマニア語の歴史』、S・プシカリウの『ルーマニア語』、カピダンとS・プシカリウの共著になる南ドナウ地方の方言に関する仕事、あるいはダキア・ルーマニアの方言に関する研究——を補完するものである。（他の言語学者たちの著作としては、Al・ロセッティの『ルーマニア語の歴史』やルーマニア言語地図が続いた。）

他方、20世紀のロマンス言語学史についてのその仕事や、『ロマンス諸語選文集』によって、ヨルグ・ヨルダンは、ロマンス言語学が少壮文法学派の言語学に対峙した段階の斯学の重要な——したがってまた世界的な——代表者として認められてきたのである。

原 注

- 1) ヨルグ・ヨルダンからの情報によると、当該の本のために書かれた、ロマンス言語学の状況に関する論文は、レオ・シュピッツァーに要請されたものだったが、後者はかつての師匠（マイア＝リュプケ）の努力を不十分と考えて、批判せざるを得なくなったため、ヨルグ・ヨルダンを同書の編集仲間に推薦したところ、彼はこの任務を引き受けたのだ、という。
- 2) ヨルダン教授は、しかしながら、一般言語学におけるフィリップデの実際の功績の一つを理解した。フィリップデの著書『ルーマニア人の起源』II巻について書いた論文（in *Revista critică*, Iași, III, 1929, pp. 73-87 [満70歳になったのを機に

ヤシのこの学者に捧げられた特別号]) において、彼はフィリッピデがヴェンカーやジリエロンによって創出されたものとは全く別の様相を備えた言語地理学の創始者であると述べている。彼は音声の状態や交替の決定因子としての調音の根底なる説に関しては、フィリッピデに道理を認めることはできなかった。しかし、既述したように、この考え方を彼は論破することはしていないのである。

- 3) Alexandru Philippide, *Opere alese. Teoria limbii* [著作選集。言語の理論], București, 1984への序説 (Alexandru Philippide-teoretician al limbajului [アレクサンドル・フィリッピデ——言語の理論家]) において指摘したように、調音の根底や心理的根底に関するフィリッピデの所説は、世界的次元での今日の言語学活動を改善に導くことができるのである。将来の真の言語学は、フィリッピデの言語に関する所説を構造主義および生成変換主義の所説で総合する——つまり、これらの所説の誤りを除去したり、これらにおいて良いものをフィリッピデの所説において本質的なものと接合する——以外には創りだし得ないのである。
- 4) 民衆ラテン語において生起した音声的過程の真の性質について、また民衆ラテン語についての偽りのイメージがフォスラーや、パールトリや、他の多くの言語学者の言語観の形成において果たした役割については、1985年9月にペクス（ハンガリー）で開催された、民衆ラテン語についての第一回シンポジウムでの筆者の口頭発表「俗ラテン語の生成と伸展」(“Genèse et évolution du latin vulgaire”) を参照（会議録は未刊）。
- 5) これら二つの言語観をこのように総合する必要性については、拙稿「民衆の口語の歴史と文語の歴史」(“Storia delle parlate popolari e storia delle lingue letterarie”, in *Philologica*, Craiova, II, 1972) において述べたことがある。

(訳注)

* ルーマニア語原著は増補改訂版 *Linguistica romanică. Evoluție, curente, metode* (București, 1962) が出た。ここに掲げられている諸国語による版も、ほとんどはこの改訂版に依拠している（英訳2nd ed. with supplement by R. Posner, “Thirty Years On”, Berkeley, 1970 あり）:

Iorgu Iordan, *Einführung in die Geschichte und Methoden der romanischen Sprachwissenschaft*. Ins Deutsche übertragen ergänzt und teilweise neubearbeitet von Werner Bahner (Berlin, 1962);

Ibid., *Lingüística románica. Evolución, corrientes, metodos*. Reelaboración parcial y notas de Manuel Alvar (Madrid, 1967);

Ibid., *РОМАНСКОЕ ЯЗЫКОЗНАНИЕ. Историческое развитие, течения, Методы* (Москва, 1971);

Ibid. -J. Orr, *Introduzione alla linguistica romanza* (Torino, 1973);

Ibid. -Maria Manoliu Manea, *Linguistica romanza*. A cura di Alberto Limentani. Traduzione di Marinella Lörinczi Angioni (Padova, 1974);
[Manea, *Gramatica comparată a limbilor romanice* (București, 1965, 1971) の一部を含む];

Ibid., *Introdução à lingüística românica* (Lisboa, 1982²) [独語版からの重訳].

** I. Iordan y M^a. Manoliu, *Manual de lingüística románica*. Revisión, reelaboración parcial y notas por M. Alvar. 2 vols. (Madrid, 1972).

(1988. 9. 21 受理)

付 記

責了後、イヴァネスクの次の本が出版されたことを知った。

Studii de istoria limbii române literare (Junimea, 1988, 368p.)

なお、アドリアン・マリーノ氏の連絡によるとヨルグ・ヨルダン教授は、1987年10月亡くなったとのことである。